

ウエンナイ神社三社調査報告

丸井芳明¹⁾・朝倉克美²⁾・佐藤修司²⁾・高島孝宗²⁾

¹⁾ 厳島神社（枝幸町文化財保護委員会）・²⁾ 枝幸町教育委員会

はじめに

枝幸町新港町のウエンナイ神社三社は、ながく宇遠内地区住民の信仰を集めてきたが、現在は住民の減少により信仰が途絶え、厳島神社に合祀されている。

現在、オホーツクミュージアムえさしに展示されている江戸後期の扁額型式の絵馬「厳島神社船絵馬」2点は本来、同社に奉納されていたものであるが、同社に奉納されるにいたった経緯については必ずしも明らかではない。

また、厳島神社に伝わる『枝幸村神祠調査票』によれば、ウエンナイ神社三社は大正12年（1923年）に創建されたことが記録されており、さらに昭和15年（1940年）の枝幸大火による焼失を免れたとの伝聞がある。このため確認できれば、

町内では最古級の建造物となる可能性がある。

昭和40年代に社殿の内部を撮影した写真には、拝殿の天井全面に絵画が奉納され、貼付されている状況が確認できる。枝幸町教育委員会（オホーツクミュージアムえさし）では、祭祀が途絶え、社殿の老朽化が進行している同社の現状を考慮し、社殿の保存状態を確認の上、調査者の一人である厳島神社宮司の丸井芳明氏と協議して遺された資料については回収を図ることとした。あわせて、回収資料の分析を通じて同社の創建年代等を検討することとした。

調査地点

ウエンナイ神社三社は、枝幸市街地の南西

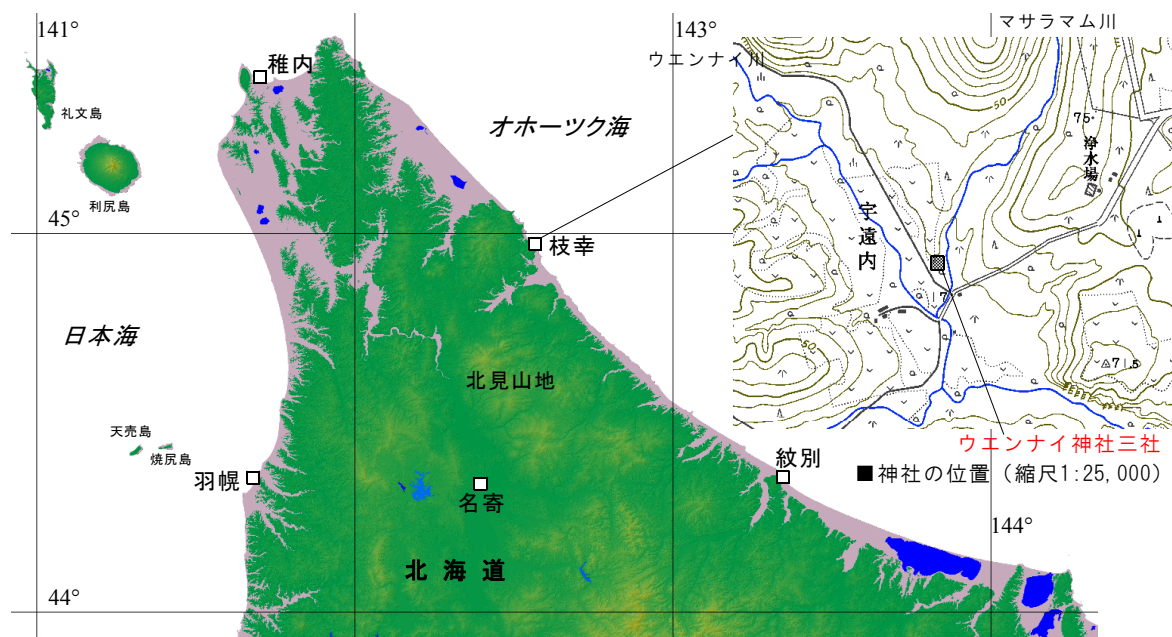


図1. 枝幸町とウエンナイ神社三社の位置

約1.8kmの地点に位置し、ウエンナイ川とその支流マサラマム川によって挟まれた標高約20mの舌状台地上に立地している。

調査方法

現地調査は、厳島神社宮司の丸井芳明氏（枝幸町文化財保護委員会副会長）の指導の下、枝幸町教育委員会教育次長の朝倉克美（当時）、同オホーツクミュージアムえさし管理学芸係長の佐藤修司（当時）、同学芸員の高島孝宗が行い、本報告は高島が執筆した。

建造物（社殿）の現状確認と資料の回収を調査の目的としており、平成15年11月14日に予備調査を、翌11月15日に本調査を実施した。なお、調査によって得られた資料についてはオホーツクミュージアムえさしにて洗浄、整理を行い、収蔵した。

真1.)。拝殿は氏子が祭礼を執り行う空間であり、屋根は前後二方向から持ち上がる「切妻造り」で、桁葎きの上にトタンを葺いている。入口は切妻の大棟に対して平行な面に開口する「平入り」型式で、向拝を付帯する（図2.）。入り口は幅1間の引き戸となっており、祭祀が続いていた頃は施錠されていたようだ。内部は畳、材木が散乱しており、回収すべき資料は特に見あたらなかった。

本殿は御神体を安置する神域となっている。屋根は四方から持ち上がり頂上で接合する「宝形造り」となっており、頂部には「宝珠」が取り付けられている。内部は一辺が273cm（1間半）の正方形で、最奥部には祭壇が設置されている。御神鏡、御神体などは既に厳島神社に合祀されており本殿内には残っていない。

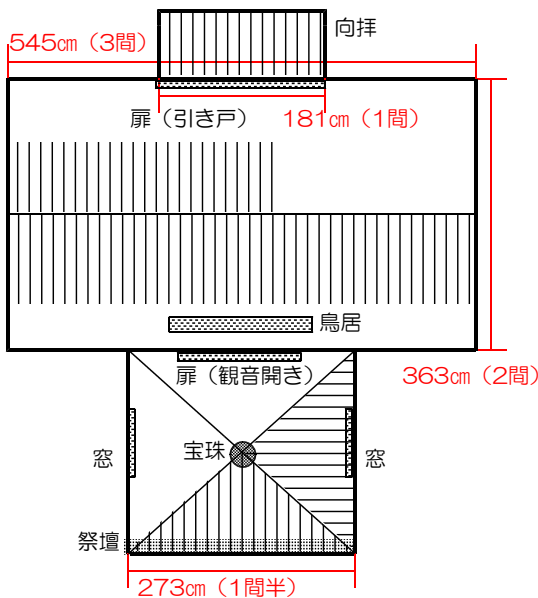


図2. ウエンナイ神社三社平面概略図



社殿の状況

昭和40年代に撮影された写真では拝殿に至る参道が整備されており、鳥居も確認されているが、調査時点では鳥居は朽ちてその存在を確認できなかった。

社殿は訪れる人もなく傷みも激しいが、調査時点ではその外観は比較的良好に保たれていた(写

写真1. 上/拝殿正面、下/本殿側面

内部には畳、御神幕、幟、賽銭箱等の神社に付属する資料が散乱しておりこれらを回収した。

拝殿と本殿は本来別個の建築物であつたらしく、木製の板壁を継ぎ足すことで両者を接

続している。また、本殿の内部に神域を画するように小さな木製鳥居が配されており、本来、本殿に付帯する鳥居を拝殿に接続する際に内部に取り込んだものと思われる。

このことから拝殿と本殿の建築年代には時間的な差があるものと考えられる。

天井絵の状況と回収

ウエンナイ神社三社の天井部分に絵画が描かれていることは早くから知られており、枝幸町史にもその記載がある（榎本，1971）。昭和50年代の枝幸町教育委員会の調査では天井絵のほとんどが残存していたが、調査時点では損傷が激しく（写真2. 上）、地域住民によってベニヤ板で覆われていた。今回の調査は天井絵の回収も目的としていたため、ベニヤ板を剥がし、絵画を固定している木製の棧を撤去した。その後、絵画を慎重に剥がしミュージアムへと搬送した（写真2. 下）。天井絵は和紙に描き、異なる絵



写真2. 上／天井絵の残存状況
下／天井絵の剥離作業

柄を重ね貼りしている。大きな一枚の紙を貼り合わせており、それぞれの格子ごとに円形の縁取りを行い、各主題の絵を描いている。

本殿はほぼ正方形であり、天井部分を6×6区画に区切って、魚や鳥、昆虫など自然の風

物に題材をとった絵画を描いている。天井中央部と両側縁部については、雨水による浸食が激しく、残存状況は極めて悪い。このため、本来絵があるべき36区画のうち、画題が判明したのは半数の18区画にとどまった。

↑ 祭壇方向

	A	B	C	D	E	F
1	×	野菜	鼠	三方	×	×
2	蓮	海老	鶴	雀	鯛	×
3	×	×	×	×	山鳩	×
4	×	×	×	×	(蟹)	×
5	×	×	人物	魚	白鷺	×
6	×	魚	軍鶏	蟋蟀	蜻蛉	×

↓ 拝殿（入口）方向

図2. ウエンナイ神社三社天井絵主題配置図



写真3. 上段左／文机と白鼠（C-1）、右／三方（D-1）
中段左／鯛（E-2）、右／交差した糸瓜（B-1）
下段左／軍鶏（C-6）、右／松と鶴（C-2）

回収した天井絵は埃の付着が著しいため、ミュージアムで筆やエアスプレーを用いてこれを取り除いた。かろうじて画題が判明したものの本来の鮮やかな色彩は失われており、

破損しているものも多い。天井への取り付け状況から考慮して、本殿の創建当時から内部を飾っていたものと考えられる。

資料の回収と分析

回収資料には奉納額や寄進者芳名額、幟など使用年代を特定できるものが多く含まれていた。

奉納額（写真4. 収蔵番号 OME03-198）を本殿床下で発見した。内容は「奉獻 本町通老丁目 カネ大伊藤チヨ 明治二十七年七月二十九日」と記されている。表面の右半分が大きく空いているため、ここに奉納物が取り付けられていた可能性が高い。ウエンナイ神社三社の創建は大正10年（1921）と記録されているので、神社の創建前に奉納されたものがそのまま本殿にのこされていたものと思われる。



奉納額 (OME03-198)



寄進者芳名額 (OME03-199)



賽銭箱 (OME03-202)



除隊記念湯飲み (OME03-204)

写真4. 回収資料

寄進者芳名額（写真4. 収蔵番号 OME03-199）は本殿のガラス窓の破損箇所に補修材として使用されていたため、ガラス窓の大きさに合わせて切断されていた。資料は損傷が激しいため、判読できた内容は一部にとどまる。額には神社への寄進者と思われる複数の氏名が記されており、「小川善一郎 亀井恵昭 富田浪五郎 古屋盛信 田中清次郎 佐藤金助 山下徹一 枝幸漁業株式会社 三国勘 ■ 時田平三郎 高田源太郎 外村商店 瀧商店」とある。このうち、古屋盛信氏については厳島神社社掌を務め昭和15

年（1940）のいわゆる枝幸大火によって焼死されたことが記録されている（榎本前掲）。

本資料の下限年代は古屋氏の存命していた昭和15年以前にさかのぼることが確実であり、本資料の存在からウエンナイ神社が昭和15年の枝幸大火による被害を免れていた可能性を指摘することが出来る。

賽銭箱（写真4. 収蔵番号 OME03-202）には記銘がなく、年代等の詳細については不明である。

写真では示していないが、幟・吹き流しは宇遠内地区の氏子が奉納したのもので、神社名は「三社神宮」となっている。ウエンナイ神社三社は市杵島姫命ほか二神を祀っており、「三社」と称したようだ。奉納年代は大正11年（1922）と記されており、神社創建直後に奉納されたものと推定される。

湯飲み（写真4. 収蔵番号 OME03-204）は「宇遠内青年会」と表記されたものと、馬の記章が描かれているものの2種類がある。後者には「祝・七騎」とあり日章旗と旧日本陸軍の連隊旗が交差した意匠が施されている。このうち「七騎」は旭川市に司令部をおいた陸軍第七師団騎兵第七連隊の略称と考えられる。宇遠内地区出身者で同連隊を除隊した者に贈られたものであろうか。騎兵第七連隊は昭和15年（1940年）に軽装甲車中隊を加え、捜索第七連隊に再編されているため、本資料はこれ以前に除隊した兵士に贈られたものと考えられることができる。

これ以外に、朱漆に金銀で折り鶴文を描いた漆器盃（OME 収蔵番号03-197）や奉納相撲に使用されたと思われる軍配団扇（収蔵番号 OME03-197）を回収している。

神社の創建年代の検討

使用年代を特定することのできた奉納額や寄進者芳名額、除隊記念湯飲みなどの回収資料の分析から本殿の創建年代は昭和15年（1940年）の枝幸大火をさかのぼることは疑いない。厳島神社に遺る『宗教法人令・諸指令・諸届出書』の「枝幸村神祠調査票」にはウエンナイ神社三社について、次のような記載がある。

神祠称号：ウエンナイ神社三社

所在地：枝幸郡枝幸村大字枝幸村字ウエンナイ

祭神：市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命

由緒沿革：大正12年6月15日市杵島姫命外二神ヲ
勸請鎮座

敷地ノ坪数：2反歩

所有名義者：田村吉五郎

建物ノ種類坪数：本殿6坪・拝殿12坪・鳥居2基

崇敬者総代員数：田村吉五郎

維持方法：ウエンナイ部落一円ノ拠出金ヲ以テ
ス 総計1年70円

関係神職名：枝幸村社殿島神社社掌

宗教者ノ居住区域及戸数：

神祠所在地ウエンナイ部落全部総戸数15戸

例祭日：6月15日

積立金：ナシ

ウエンナイ神社三社の祭神は市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命の三神で、市杵島姫命が主神であり、「三社」という名称は市杵島姫命ほか二神を祭ることに由来するものと思われる。古くから航海の保護神として崇敬されてきた市杵島姫命を祭神とする神社は、『枝幸村神祠調査票』によれば枝幸村内14社のうち殿島神社とウエンナイ神社三社の2社しかなく、両社が他の神社と異なり、特別な関係を保っていたことがうかがわれる。

枝幸町史によれば、殿島神社の創立は文化年間（1804-1817）以降にさかのぼり、天保4年（1833）に又十柏屋藤野家が寄進した明神鳥居が現在に伝わっている。北海道における殿島神社は漁場の経営にあたる場所請負人が勸請した公的な性格が強い神社であり（矢島・赤松，1985）、明治9年（1876）には早くも枝幸村社と公称している。明治20年（1887）8月には田中小右衛門が寄付金を集めて神殿を増築、さらに明治28年（1895）には本殿、社務所を増改築している。翌明治29年（1896）には村社に列格を果たし*、明治42年（1909）には御輿・山車を繰り出して盛大な祭典を挙行了た。

この時点の殿島神社は枝幸港を望む海岸にほど近い高台に位置しており、明治期に殿島神社を管理した柳本徳栄の尽力により設置された御神燈が周辺を照らしていたらしい。大正7年（1

918）に、官幣中社殿島神社より分霊勧請、さらに大正10年（1921）に現在地に遷宮、大正12年（1923）には神饌幣帛供進神社に指定されている（庁令第105号）。

これに対して、ウエンナイ神社三社は殿島神社が遷宮した後の大正12年（1923年）に創立され、枝幸町史によれば殿島神社の旧社殿を移築して社殿としたことを伝えている（榎本掲掲）。また、今回回収した幟に「三社神宮 大正十一年」とあることから、創建年代はさらにさかのぼる可能性もある。

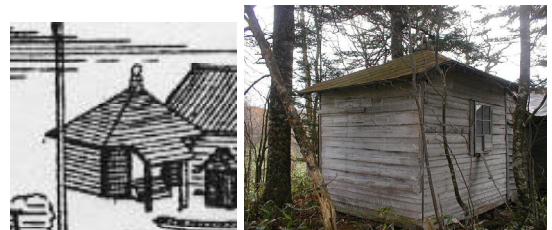


写真5. 上／『北海立志編』枝幸村村社 殿島神社

下左／『北海立志編』付帯施設の部分拡大

下右／ウエンナイ神社三社の本殿

海岸付近に位置する明治期の殿島神社を描いた上の絵図が、明治30年（1897）に発行された『家屋図入・北海立志編』に掲載されている（高崎，1897）。前述の柳本の建立した御神燈や鳥居や本殿、さらにその他の付帯施設が描かれている（写真5.）。図中の本殿に向かって左側に描かれた拝殿と考えられる付帯施設は宝形造りの屋根に宝珠を載せている。

この建造物は現在のウエンナイ神社三社の本殿に近似しており、枝幸町史の記述にある

よう、絵図中の建造物が宇遠内地区に移築されたものと考えられる。

厳島神社が海岸沿いの高台から現在の栄町に遷宮した直後にウエンナイ神社三社が創立されており、詳細は不明なものウエンナイ神社三社を建立する際に旧厳島神社の社殿を移築したとする枝幸町史の記述は信頼できる。

文化財としての評価と課題

ウエンナイ神社三社の本殿と厳島神社絵図との対比により、枝幸町史の記述通り旧厳島神社の付帯施設が宇遠内地区に移築された可能性が高いことが判明した。

両神社の創建年代の前後関係に大きな矛盾点がなく、両神社の祭神が一致するなどの共通点から創建当初から厳島神社とウエンナイ神社三社が密接な関わりを持ってたことが推察される。

また、回収資料の分析から、ウエンナイ神社三社の創建年代（大正10年）をさかのぼる資料が確認され、同社が昭和15年の枝幸大火の被害を免れた可能性が高いことが判明した。

厳島神社社殿の創建年代は記録が乏しく、詳細は不明だが明治初期にさかのぼる可能性があり、枝幸町内では最古級の建造物と考えられる。

当町は昭和15年の枝幸大火によって明治大正期、昭和戦前期の建造物の多くを失っており、その文化財的価値は高いものとする。あわせて、今回の調査によって回収した天井絵についても明治初期にさかのぼる年代を与えることが可能であり、同様に貴重な資料と評価することができる。

一方で調査を行った翌平成16年（2004年）に道北地方に大きな被害をもたらした台風16号は、この古い建造物にも大きな爪痕を遺した。屋根を飾る宝珠は失われ、屋根や壁も激しく損傷し、100年以上の風雪に耐えた社殿は崩壊の危機に瀕している。

神社としての役割を終えた以上、町内最古の建築物を後世に伝えるためには文化財保護の観点から諸問題を解決する必要があるだろう。

参考文献

榎本守恵，1971；枝幸町史上巻．枝幸町厳島神社，年代不詳；枝幸村神祠調査票
高崎龍太郎，1897；北海立志編48
矢島睿・赤松守雄，1985；近世蝦夷地西沿岸における弁天社の建立について．北海道開拓記念館調査報告24

※厳島神社の村社列格の年代については、枝幸町史上下巻の間で齟齬があり、正確な年代については不明である。